

No. 1.3.2.2 補

Date 63.12.5

造波抵抗の極小値問題

12.12 補
12.15

概要

1. ミツタエル船型

2. 球船型; マヤ-ア-4型

3. 沿水線

4. 細長体

5. 圧力分布

6. 平板滑車

7. 飛沫抵抗

8. 矩形圧力層の極値問題

頁

2

6

13

14

15

18-19

20-23

24-26

概要

本覚書では 細長船、薄・船^のの数学的模型によって、
高速における造波抵抗の予想しうる最低値の
見当をつけようとするものである。

と言うのは造波抵抗の最小値は0であるが、それに
対応する特異点はやいになって半幅が π に等しい等の
不都合が出て来るので、現実的な船型として可能な
ものについては造波抵抗がかなり大きくなるので、実際
に数値計算に探索するより仕方がない筈である。

さて高速とは一般にフルード数0.5以上と言う意味
とするが、實際上ラスト・ハーフ（普通はフルード数0.6位）
より低速側と高速側では傾向的に異なるので
も、正確にはラスト・ハーフより高速側と言う方が
よいであろうし、またそこに重点をおいて考える事にする。
またフルード数1以上で L/B が大きいと摩擦抵抗が
大変大きくなるので、経済性を追求する船として
は困難になって来るので、速度の上限も大抵
その辺で止める事にする。

1. 薄い船の造波抵抗

薄い船の近似では半幅曲線が $\eta(x, z)$ で表わされる
船の造波抵抗 R は次式で与えられる。

$$R = \frac{\rho g}{\pi} K_0^3 \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F(K_0 \sec \theta, \theta)|^2 \sec^5 \theta d\theta, \quad (1.1)$$

$K_0 = g/V^2$

$$F(K, \theta) = \int_{-T}^0 \int_{-l}^l \eta(x, z) e^{Kz - iKx \cos \theta} dx dz, \quad (1.2)$$

l は半船長, T は吃水, 但し 以下 $l=1$, 船速 $V=1$ と訂算する。

船型近似排水量 ∇ とするに

$$\nabla = 2 \int_{-T}^0 \int_{-l}^l \eta(x, z) dx dz, \quad (1.3)$$

さて一般的に η は次の様に表わす事が出来る。

$$\eta(x, z) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n(z) \frac{\cos n\phi}{\sin \phi}, \quad x = -\cos \phi, \quad (1.4)$$

右方よく知られてゐる様に ^非前後対称性は造波抵抗を激増させるので、以下右の方の場合ばかり考慮する。
方針とする。(また訂算は独立に行つて加算合はしない)

とすると

$$\nabla = 2\pi \int_{-T}^0 a_0(z) dz, \quad (1.5)$$

高速の場合一般に船型の細かい変化は造波抵抗にあまり影響しないので変分問題の副条件としては与えられたフレッド数に対して排水量に限る事とする。

$a_n(z)$ は吃水方向の半幅の変化つまり肋骨線の模倣を表わすが、この変化に対し振幅周数の変化は単純であるのであまり大きく変化させず存かろうから次のようにとる事とし必要に応じて、さらに何項か追加を加えればよからう。

$$a_n(z) = \frac{1}{T} a_0^{(n)} + \frac{a_1^{(n)}}{T} \left(\frac{1}{2} + \frac{z}{T} \right), \quad (1.6)$$

$$\int_{-T}^0 a_n(z) dz = a_0^{(n)}, \quad (1.7)$$

よって (1.5) は $\nabla = 2\pi a_0^{(0)}$ あるいは $\frac{\nabla}{L} \equiv \delta = \frac{1}{T} a_0^{(0)}$, (1.8)

L は船長で今は2とする。

さて次のように標準化しよう。

$$\eta^*(x, z) = \frac{1}{a_0^{(0)}} \eta(x, z) = \frac{1}{T} \sum_n \left[a_0^{(n)} + c_n^{(n)} \left(\frac{1}{2} + \frac{z}{T} \right) \right] \frac{\cos n\phi}{\sin \phi}$$

$$c_m^{(n)} = \frac{a_{2m}^{(n)}}{a_0^{(n)}}, \quad c_0^{(0)} = 1, \quad (1.9)$$

$$\bar{H}^*(k, \theta) = \int_{-T}^0 \int_{-L}^L \psi^*(x, z) e^{ikz - i k x \cos \theta} dx dz, \quad (1.10)$$

それと (1.1) は

$$r = \frac{R}{\rho g \sqrt{\frac{\gamma}{\rho g}}} = \frac{2K_0^3}{\pi^3} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |\bar{H}^*|^2 \sec^5 \theta d\theta, \quad (1.11)$$

$$-\bar{H}^* \int_0^{\pi} \cos n\phi e^{-ik \cos \phi \cos \theta} d\phi = \pi (-i)^n J_n(k \cos \theta), \quad (1.12)$$

$$\frac{1}{T} \int_{-T}^0 e^{kz} dz = \frac{1}{k} (1 - e^{-kT}) = \frac{1}{k} f_0(kT), \quad (1.13)$$

$$\begin{aligned} \int_{-T}^0 e^{kz} \left(\frac{1}{2} + \frac{z}{T} \right) dz &= \frac{1}{k} \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{2} e^{-kT} \right) - \frac{1}{kT} \int_{-T}^0 e^{kz} dz \\ &= \frac{1}{k} \left[\frac{1}{2} + \frac{1}{2} e^{-kT} - \frac{1}{kT} (1 - e^{-kT}) \right] \\ &= \frac{1}{k} \left[\frac{1}{2} - \frac{1}{kT} + \left(\frac{1}{2} + \frac{1}{kT} \right) e^{-kT} \right] = \frac{f_1(kT)}{k}, \quad (1.14) \end{aligned}$$

それより

$$\bar{H}^*(k, \theta) = \frac{\pi}{kT} \sum_n \left[C_0^{(n)} f_0(kT) + C_1^{(n)} f_1(kT) \right] (-i)^n J_n(k \cos \theta) \quad (1.15)$$

$$\therefore r = \sum_{m, \mu} \sum_{n, \nu=0}^{\infty} C_m^{(n)} C_{\mu}^{(\nu)} I_{m, \mu}, \quad (1.16)$$

$$I_{m, \mu}^{n, \nu} = \frac{2K_0^3}{\pi T^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} f_m(kT \sec \theta) f_{\mu}(kT \sec \theta) J_n(kT \sec \theta) J_{\nu}(kT \sec \theta) \times \sec^5 \theta d\theta,$$

なお対称性から n は n の偶数のみ, 奇数のみの時だけ
値を有し, 他は 0 となる。従って虚数値をとる事は無い。

この積分を計算において (1.16) を $C_0^{(10)} = 1$ の下に
極小値問題をとけばよい。

そのような解の内 $\lambda(x, z)$ が負値をとるものは捨てるは
ない。

2. マイヤ-ワーム型, 球船着型

前節のように直接 η を扱おうかわりに二次式で表わされた補助関数 σ で考えてみよう。

$$\eta(x, z) = \left(\frac{\partial}{\partial z} - \frac{1}{k_0} \frac{\partial^2}{\partial x^2} \right) \sigma(x, z), \quad (2.1)$$

これは z を時間 (上向きに正) とみなすと一次元の熱伝導の方程式で σ は温度, η は熱源である。

従ってよく知られているように与えられた初期条件, 境界条件によつて σ は一意的に定まるから, η のかわりに σ で考えても一般性を損なわない。

まず排小量は

$$\frac{\nabla}{2} = \int_{-T}^0 \int_{-1}^1 \eta(x, z) dx dz = \int_{-1}^1 [\sigma(x, 0) - \sigma(x, -T)] dx - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) - \sigma_x(-1, z)] dz, \quad (2.2)$$

ユツ42) 変数は

$$H(R, \theta) = \int_{-T}^0 \int_{-1}^1 \eta(x, z) e^{\frac{1}{2} R z - i p x} dx dz, \quad p = k_0 \cos \theta, \quad (2.3)$$

$$R \rightarrow k_0 \alpha \cos \theta,$$

$$= \int_{-1}^1 [\sigma(x, 0) e^{-i p x} + \sigma(x, -T) e^{-R T - i p x}] dx$$

$$- \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) e^{-i p} - \sigma_x(-1, z) e^{i p}] e^{\frac{1}{2} R z} dz$$

$$+ \frac{i p}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma(1, z) e^{-i p} - \sigma(-1, z) e^{i p}] e^{\frac{1}{2} R z} dz, \quad (2.3)$$

$$R = k_0 \alpha \cos \theta, \quad p = k_0 \sin \theta$$

と仮して、スプレッド積分がなされる点がいまわりの点であるが、この点（極点問題）では、任意係数の数は前節と同様に「1」である。

そこで、境界条件と初期条件を次のように定めよう。

$$\sigma(\pm 1, z) = 0, \quad \sigma(x, -T) = 0, \quad \dots (2.4)$$

さらに

$$\frac{\nabla}{z} = \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) dx - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) - \sigma_x(-1, z)] dz, \quad (2.5)$$

$$\begin{aligned} \bar{H}(k_0, \alpha > 0, \theta) = & \int_{-1}^1 \sigma(x, 0) e^{-ipx} dx \\ & - \frac{1}{k_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) e^{ip} - \sigma_x(-1, z) e^{-ip}] e^{kz} dz, \quad (2.6) \end{aligned}$$

さらに

$$\sigma(x, z) = (1-x^2)(z+T), \quad \dots (2.7)$$

おくと

$$\psi(x, z) = (1-x^2) + \frac{2x}{k_0}(z+T), \quad \dots (2.8)$$

となり、V 形船型あるいはマヤー・フォーム型のような船型を表わしていると考えられるので、以下、マヤー・フォーム型と存づけよう。

この型では、船首尾附近で σ_{xx} 従って ψ_{xx} が正になることが負に存るので、 ψ_{xx} の水線傾率は船首尾附近で負、つまり、凸でなければ存らない。
外側に

もう一つの簡潔な場合は、

$$\sigma(\pm 1, z) = 0, \quad \sigma(x, 0) = 0, \quad (2.9)$$

であるから

$$\frac{\Delta}{z} = - \int_{-1}^1 \sigma(x, -T) dx - \frac{1}{\kappa_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) - \sigma_x(-1, z)] dz, \quad (2.10)$$

$$F(\kappa_0 \alpha r(\theta, \theta)) = - \int_{-1}^1 \sigma(x, -T) e^{-\kappa_0 T - i p x} dx \\ - \frac{1}{\kappa_0} \int_{-T}^0 [\sigma_x(1, z) e^{-i p} - \sigma_x(-1, z) e^{i p}] e^{\kappa_0 z} dz, \quad (2.10)$$

となる。

簡潔な例として

$$\sigma(x, z) = (1-x^2)^2 z, \quad (2.11)$$

$$\psi(x, z) = (1-x^2)^2 + \frac{4(3x^2-1)}{\kappa_0} z, \quad (2.12)$$

のように、球船首船型を代表していると考えられるので、以下、球船首型と名づけよう。
 前者と反対に σ_{xx} は船首尾で正となるから、
 船首に於ける場合が悪く、従って水線
 形状は変曲点を持ち、球船首船型又は
 2-4 グリッチ・フォームの特徴を有する事に
 なる。

これらの2つの型は船型の類型の内では

代表的なものであるから、これらについて極値問題を
考えてみる事にしよう。

なお (2.11), (2.12) の例では $\sigma_x(\pm 1, z) = 0$ となっているが
この時は (2.10) からわかるように $z = -T$ にある没水体と
造波抵抗は等しくなり著者等が前に没水体型と等しい
たものと同じが、一般には σ_x は有限でありうるので
ここではそういう場合を考えるものとし、没水体については
節を変えて取扱う。

また簡単の爲に以下船型は前後対称の場合のみとする。

1) マイヤ-7 π -4 型

$$\sigma_{xx}(x, z) = - \sum_{n=0}^{\infty} a_n(z) \frac{\cos n\phi}{n\phi}, \quad x = -\cos\phi, \quad (2.13)$$

$$\sigma_x(x, z) = a_0(z) \left(\frac{\pi}{2} - \phi\right) - \sum_{n=2}^{\infty} \frac{a_n(z)}{n} \rho \sin n\phi, \quad (2.14)$$

$$\begin{aligned} \sigma(x, z) &= a_0(z) \left\{ \frac{\pi}{2} - \rho \sin\phi - \left(\frac{\pi}{2} - \phi\right) \cos\phi \right\} \\ &= \frac{1}{2} \sum_{n=2}^{\infty} \frac{a_n(z)}{n} \left\{ \frac{\rho \sin(n-1)\phi}{n-1} - \frac{\rho \sin(n+1)\phi}{n+1} \right\}, \quad (2.15) \end{aligned}$$

対称性を仮定して和記号は $n=2$ からとるが

$n=1$ からとると $\sigma(\pm 1, z) \neq 0$ となるので注意。

$$\nabla = \frac{\pi}{2} a_0(0) + \frac{2\pi}{k_0} \int_{-T}^0 a_0(z) dz, \quad (2.16)$$

$$F(\omega, x, 0, 0) = \frac{c\omega^2 B}{k_0} \left[- \int_{-T}^1 \sigma_{xx}(x, 0) e^{-i p x} dx + 2 c \omega p \int_{-T}^0 \sigma_{xz}(1, z) e^{kz} dz \right] \quad (2.17)$$

∴

$$\left. \begin{aligned} a_0(z) &= a_0^0 \left(\frac{z}{T} + 1 \right) + a_1^0 \frac{z}{2T} \left(\frac{z}{T} + 1 \right) \\ \frac{d}{dz} a_0(z) &= \frac{1}{T} a_0^0 + \frac{a_1^0}{2T} \left[\frac{2z}{T} + 1 \right] \\ \int_{-T}^0 a_0(z) dz &= \frac{T}{2} a_0^0 - \frac{T}{6} a_1^0, \quad a_0(0) = a_0^0 \end{aligned} \right\} (2.18)$$

∴

$$\nabla = \frac{\pi}{2} a_0^0 \left(1 + \frac{2T}{k_0} \right) - \frac{\pi T}{6 k_0} a_1^0; \quad (2.19)$$

$$\begin{aligned} \int_{-T}^0 \sigma_{xz}(1, z) e^{kz} dz &= - \frac{\pi}{2} \int_{-T}^0 \frac{d a_0(z)}{dz} e^{kz} dz = - \frac{\pi}{2T} \int_{-T}^0 e^{kz} \left[a_0^0 + \frac{a_1^0}{2} \left(\frac{2z}{T} + 1 \right) \right] dz \\ &= - \frac{\pi}{2kT} \left[a_0^0 f_0(kT) + \frac{1}{2} a_1^0 f_1(kT) \right] \end{aligned} \quad (2.20)$$

$$\left. \begin{aligned} f_0(kT) &= 1 - e^{-kT} = k \int_{-T}^0 e^{kz} dz \\ f_1(kT) &= \frac{k}{2} \int_{-T}^0 e^{kz} \left\{ \frac{2z}{T} + 1 \right\} dz \end{aligned} \right\} (2.21)$$

$$\begin{aligned}
 F(k_0 a \cos \theta, \theta) &= \frac{\cos^2 \theta}{k_0^2} \left[\pi \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n}(0) (-1)^n J_{2n}(k_0 a \cos \theta) \right. \\
 &\quad \left. - \frac{\pi}{2kT} \cos \theta \left\{ a_0^0 f_0(kT) + a_1^0 f_1(kT) \right\} \right] \quad (2.22) \\
 &= \frac{2 \cos^2 \theta \cdot \sqrt{\pi}}{k_0^2} \left[\sum_{n=0}^{\infty} C_{2n} (-1)^n J_{2n}(k_0 a \cos \theta) \right. \\
 &\quad \left. - \frac{\cos \theta}{2kT} \left\{ C_0^0 f_0(kT) + C_1^0 f_1(kT) \right\} \right] \quad (2.23)
 \end{aligned}$$

$$C_{2n} = \frac{a_{2n}(0)}{\frac{2}{\sqrt{\pi}} \sqrt{\pi}} \quad , \quad \left(\begin{aligned} a_0^0 &= a_0(0) \\ C_0 &= C_n^0 \end{aligned} \right) \quad C_0^0 = \frac{a_0^0}{\frac{2}{\sqrt{\pi}} \sqrt{\pi}} \quad (2.23)$$

$$C_0^0 \left(\frac{1}{k_0} \right)^2 = \frac{1}{2k_0} C_1^0 = 1 \quad (2.24)$$

$$\gamma = \frac{R}{\rho \beta \omega \left(\frac{\sqrt{\pi}}{k_0} \right)^2} = \frac{\sqrt{2} \beta}{\sqrt{\pi} k_0} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F^*|^2 \cos \theta d\theta \quad (2.25)$$

$$\begin{aligned}
 F^* &= \sum_{n=0}^{\infty} C_{2n} (-1)^n J_{2n}(k_0 a \cos \theta) \\
 &\quad - \frac{\cos^2 \theta}{2k_0 T} \left\{ C_0^0 f_0(k_0 T \cos \theta) + C_1^0 f_1(k_0 T \cos \theta) \right\} \cos k_0 a \cos \theta \quad (2.26) \\
 &\quad C_0 = C_0^0
 \end{aligned}$$

(2.25) を (2.24) の条件で 1.12 と 1.15 より

$$\left(\frac{\sqrt{\pi}}{2} \sqrt{\frac{\pi}{k_0^2}} \cos^2 \theta \right)^2$$

ii) 球殻型

$\sigma(x)$ は (2.15) で与えられるものとす。

従って
$$\nabla = -\frac{\pi}{2} a_0(-T) + \frac{2\sqrt{\pi}}{K_0} \int_{-T}^0 a_0(z) dz, \quad (2.27)$$

ここで
$$a_0(z) = a_0^0 \frac{z}{T} + a_1^0 \frac{z}{2T} \left(\frac{z}{T} + 1 \right), \quad (2.28)$$

よって
$$\left. \begin{aligned} a_0(-T) &= -a_0^0, & \frac{1}{T} = T^2 \\ \int_{-T}^0 a_0(z) dz &= -\frac{a_0^0}{2} T + \frac{a_1^0 \cdot T}{12} \end{aligned} \right\} (2.29)$$

$$\therefore \nabla = \frac{\pi}{2} a_0^0 - \frac{\pi T}{6K_0} a_1^0 \quad \chi, \quad (2.30)$$

$$F(K_0 \cos^2 \theta, \theta) = \frac{\cos^2 \theta}{K_0^2} \left[\int_{-T}^0 \sigma_{xx}(x, -T) e^{-ipx} dx + 2 \cos \theta \int_{-T}^0 \sigma_{xz}(z) e^{-i1/2 z} dz \right], \quad (2.31)$$

$$= \frac{\cos^2 \theta}{K_0^2} \left[-\pi \sum_n a_{2n}(-T) (-1)^n J_{2n}(p) + \frac{2 \cos \theta}{RT} \left\{ a_0^0 f_0(pT) + a_1^0 f_1(pT) \right\} \right],$$

$$= \frac{2\sqrt{\cos^2 \theta}}{K_0^2} \left[e^{-RT} \sum_n C_{2n} (-1)^n J_{2n}(p) + \frac{2 \cos \theta}{RT} \left\{ C_0^0 f_0(pT) + C_1^0 f_1(pT) \right\} \right],$$

$$C_{2n} = -\frac{a_{2n}(-T)}{\frac{2}{\pi} \sqrt{\cos^2 \theta}}, \quad C_0^0 \equiv C_0, \quad C_1^0 = \frac{a_1^0}{\frac{2}{\pi} \sqrt{\cos^2 \theta}}, \quad (2.32)$$

$$r = \frac{R}{\rho g v \left(\frac{\cos^2 \theta}{\pi} \right)^{1/2}} = \frac{1/2 \sqrt{\pi}}{\pi K_0} \int_0^{\pi} |F^*|^2 \sin \theta d\theta, \quad (2.33)$$

閉条件

$$1 = C_0 - \frac{T}{3K_0} C_1^0, \quad \chi \quad (2.34)$$

3. 没水体

$z = -T$ の x 軸に半直立したてられた没水体を考へよう。その強さを近似的に断面積 $A(x)$ に比例する。

$$A(x) = \frac{\nabla}{\pi \sin \theta} \sum_{n=0}^{\infty} a_n \cos n\theta \quad (a_0 = 1) \quad (3.1)$$

よって

$$r = \frac{R}{\rho g V \left(\frac{V}{L}\right)^3} = \frac{8k_0^3}{\pi} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-2k_0 T \cos \theta} |F^*|^2 \sec \theta d\theta \quad (3.2)$$

$$F^* = \sum_{n=0}^{\infty} (-i)^n a_n J_n(k_0 \sec \theta) \quad (3.3)$$

前述では石井の半没水船型のように、これに先の尖った strut (or sail) を加えると造波抵抗を小さくする事が出来るが高速では干渉効果は小さくてあまり効果が期待出来ない。

この干渉効果は没水体の波の位相と strut のそれとが k_0 の大きい所で互に逆になる所に起因し、高速ではそれが期待出来ない事による。

1節では一般の場合を考へるのにこの場合はそれと合ふものも考へて扱かれない。

またこれによる没水型船型は高速では船首にくびれが出来て現実的船型にならない。

4. 細長船

前節の没水体から没水体型の水面電通船の型を得る試みは体速では可能であるが、その高次特異性の高い高速では現実的な船型が得られない。

この高次特異性をとけるには $A(\pm 1) = A'(\pm 1) = 0$ とすればよく、この場合 $T \rightarrow 0$ とすると所謂細長船が得られる。

$$A(x) = \frac{\nabla}{\pi} \sum_{n=2}^{\infty} \frac{a_n}{2^n} \left\{ \frac{\sin(n-1)\phi}{n-1} - \frac{\sin(n+1)\phi}{n+1} \right\}, \quad (4.1)$$

$$A''(x) = \frac{\nabla}{\pi} \sum_{n=2}^{\infty} a_n \frac{\cos n\phi}{\sin \phi}, \quad (4.2)$$

$$\nabla = \int_{-1}^1 A(x) dx = \frac{\nabla}{8} \cdot a_2, \quad a_2 = 8, \quad (4.3)$$

$$r = \frac{8}{\pi k_0} \int_0^{\frac{\pi}{2}} e^{-2k_0 T \sec \theta} \frac{1}{|\bar{H}^*|} \sec \theta d\theta, \quad (4.4)$$

$$\bar{H}^* = \sum_{n=2}^{\infty} (-i)^n a_n J_n(k_0 \sec \theta), \quad (4.5)$$

この最適解は高速で前節のものと同様に倍になる。(又 $T \rightarrow 0$ で r は有限である)

これは又 2 節の場合によく似ているが、やはり 2 節の場合の方が抵抗が小さくなると思われる。

5. 圧力分布

前節迄の所謂飛沫量型船型に対しては所謂線種分項の問題(直進では高次の微小量と考えられるが)とか船型と特異点の対応が線型理論的には簡単だが、もう少し精密にするために流線追跡をしようとすると水面附近の流線をどう採ればよいかなど理論的な問題点が出てくる。

特に水面を貫通するのであるから、水面変位は大きくなり、それがよく観察されるように砕けて飛沫となり抵抗成分となり得ると考えられるがそれを予測する理論が今の所見当たらない。

その点で圧力分布は線型理論の範囲内で Consistent な理論模型を提供し、船型の訂算も可能であり、飛沫抵抗も予測しうる。

また飛沫の出ない船型も容易に求められる。

今後の結果では飛沫の出ない船型は動的浮力は小さく、また圧力分布面の形状に矩形がよくなり、中は大きい方が抵抗が小さい。

$E_0 \rightarrow L, B$ の矩形面に分布する圧力を
($L=2$)

$$p(x, y) = A \sum_{n, m} a_{nm} \sin n\phi \sin m\psi \quad (5.1)$$

と仮定。
 $(x = -\frac{L}{2} \cos\phi, y = -\frac{B}{2} \cos\psi)$

$$P_{gV} = \iint p(x, y) dx dy = \frac{\pi^2}{16} LB \cdot A a_{11} \quad (5)$$

と仮定から

$$a_{11} = 1$$

と仮定

$$A = \frac{16 P_{gV}}{\pi^2 L \cdot B} \quad (5.2)$$

逆変換は

$$R = \frac{K_0^2}{\pi \rho U^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F|^2 \sec^2 \theta d\theta, \quad (5.3)$$

$$\bar{H} = \iint p(x, y) e^{iK_0(x \cos\theta + y \sin\theta) \sec^2 \theta} dx dy, \quad (5.4)$$

と仮定

$$\int_0^{\pi} e^{iz \cos\phi} \sin n\phi d\phi = \frac{\pi n}{z} i^{n-1} J_n(z), \quad (5.5)$$

と仮定から

$$\bar{H} = \frac{\pi^2 A \cos^2 \theta}{K_0^2 \sin \theta} \sum_{n, m} a_{nm} z^{1+n+m-2} J_n(K_0 \sec^2 \theta) J_m(K_0 \sec^2 \theta \sin \theta), \quad (5.6)$$

$$\lambda = B/L$$

$$r = \frac{R}{PSP\left(\frac{V}{L^3}\right)} = \frac{128\pi}{K_0 \lambda^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F^*|^2 \frac{\cos\theta}{\sin^3\theta} d\theta, \quad (5.7)$$

$$F^* = \sum_{n,m} i^{n+m-2} a_{nm} J_n(K_0 a \cos\theta) J_m(K_0 \lambda a \sin^2\theta), \quad (5.8)$$

圧力分布では 幅方向の分布形状は 重要で 逆品型とすると 干渉効果により 発散角が 小さくなるようである。

6. 平板滑走面

滑走面の性能は 矩形平板の場合が「最も良」としておき、又 Savitsky の有名な実用式があるので、少し記して見よう。

Savitsky によれば「矩形平板の揚力係数は

$$C_L = \frac{\rho g V}{\rho V^2 B} = \left(\frac{180\alpha}{\pi}\right)^{1/2} \left[\frac{0.120}{\sqrt{\lambda}} + \frac{0.055}{\lambda^{5/2}} \frac{gB}{V^2} \right] \quad (6.1)$$

$$\lambda = B/L \quad (\text{この式では } \lambda \text{ はこの係数となっている})$$

α : in rad.

この右辺の1項が「動的浮力」で、2項が「静的浮力」の項である。

今 $F = V\sqrt{gL}$ としてその比をとると

$$\frac{\text{動的浮力}}{\text{静的浮力}} = 2.18\lambda F^2, \quad (6.2)$$

となるので、例えは $\lambda = 0.2$ とすると $F \geq 1.51$ で

動的浮力が大きくなる事になる。

つまり λ の小さい時には、^{静的浮力} 係数 F が大きくなる」と

動的浮力はあまり大きくなりません。

さて (6.1) より $R_p/P_{PV} = \alpha$ であるから、

$$r = \frac{R_p}{P_{PV} \left(\frac{R}{S}\right)} = \frac{1.826}{\delta^{0.1} \left[\sqrt{1 + (4583 + 1F^2)} \right]^{0.1}} \quad (65)$$

R_p : 圧力断片

となる。

少し数値を計算してみよう

δ	λ	F	r	飛沫なし船型 (A形) の場合	
				r (縦断面)	V (横断面)
.005	0.2	1.0	10.95	3.79	9.14
		1.0	9.43	4.65	23.41
	0.4	1.0	6.88	2.57	3.73
		1.0	5.41	1.97	4.74

となる。

理論計算値の方がどう一つ信頼性がよく判らな
 ので、今の所これから飛沫なし船型が良しと断定は
 (か) ねる。

また浸水露面積は飛沫なしの方がずっと大きくなる
 のでこの点を考えてと一層悲観的になる。

しかし飛沫なし船型は深い胴部をもち、
 波浪中の性能は良いと考えられる。

7. 飛沫抵抗

高速では丸板によって示されたように 飛沫のまわりの
流れた場は 翼の場合に近づき、逆は抵抗は誘導
抵抗に近づく。

しかし ^本抵抗については 翼の場合 ^(粘性を考慮しなければ) 誘導抵抗の2で
分れば "細長置 _(平板) では 近似的に

$$\frac{R_i}{W} = \frac{\alpha}{2} \quad (7.1)$$

R_i : 誘導抵抗, W : 排水盤量, α : 迎角

と与えられるが、滑走板では単純に

$$\frac{R}{W} = \alpha, \quad (7.2)$$

この差は、翼では前縁吸力力が働くけれど、滑走
板ではそれがなく 逆に 飛沫となって系外に出て行き
運動量損失 ^に 抵抗と有ると考えられる。

それ故 (7.2) と (7.1) の差は 飛沫抵抗と考えてよい。

即ち 飛沫抵抗 R_s は今の場合

$$\frac{R_s}{W} = \frac{R}{W} - \frac{R_i}{W} = \frac{\alpha}{2}, \quad (7.3)$$

となって 全抵抗 R の半分を占める事になる。

一方 矩形平板の場合には 近似的に
_(今の場合)

$$W = \frac{\pi}{4} \rho B^3 V^2 \alpha, \quad \alpha = \frac{4W}{\pi \rho B^3 V^2} = \frac{4\delta}{\pi \lambda F^2}, \quad (7.4)$$

$$\delta = \frac{V}{L^3}, \quad \lambda = \frac{B}{L}, \quad F = V \sqrt{g} L$$

と式(7.4)の右辺を(7.2)に代入すると

$$\gamma = \frac{R}{W \cdot \delta} = \frac{4}{\pi \lambda F^2}, \quad (7.5)$$

となるが、これを(6.8)に代入する式である。

数値的にはかなりの差があるが定性的にはよく似ている
と丸座にすれば"龍深抵抗は次式で与えられる。

$$R_S^M = \frac{\pi L}{2 \rho V^2} \int_{-\frac{B}{2}}^{\frac{B}{2}} \rho_0(y)^2 dy, \quad (7.6)$$

$$\text{即ち} \quad \rho_0(y) = \frac{1}{\pi} \int_{-\frac{L}{2}}^{\frac{L}{2}} \rho(x, y) dx, \quad (7.7)$$

$$\text{然し今は} \quad R_S = \frac{\pi L}{8 \rho V^2} \int_{-\frac{B}{2}}^{\frac{B}{2}} \sigma^2(y) dy, \quad (7.6')$$

$$\text{とすると} \quad \rho(x, y) = A \sum_n \sum_m \frac{a_{nm} \cos n\phi}{\sin \phi} \sin m\psi, \quad (7.8)$$

$$x = -\frac{L}{2} \cos \phi, \quad y = -\frac{B}{2} \cos \psi,$$

とかくと

$$\sigma(y) = A \sum_m \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{nm} \sin m\psi, \quad (7.9)$$

$$\rho \varphi \nabla = \iint \rho(x, y) dx dy = \frac{LB}{8} \pi^2 A a_{01},$$

以下 $a_{01} = 1$ とおくと式(7.10)

$$A = \frac{8 \rho \varphi \nabla}{\pi^2 L B}, \quad (7.10)$$

22.

$$\int_0^\pi \sin n\varphi \sin m\varphi \lambda \varphi d\varphi = \frac{1}{2} \int_0^\pi (\cos(n-m)\varphi - \cos(n+m)\varphi) \lambda \varphi d\varphi$$

$$= \frac{\lambda}{4} \int_0^\pi [\lambda^{\frac{n-m}{2}} \varphi - \lambda^{\frac{n+m}{2}} \varphi - \lambda^{\frac{n-m}{2}} \varphi + \lambda^{\frac{n+m}{2}} \varphi] d\varphi$$

$$= 0 \quad \text{for } n-m: \text{ odd.}$$

$$= \frac{1}{(n-m)^2 - 1} - \frac{1}{(n+m)^2 - 1} \quad \text{for } n-m: \text{ even}$$

$$\therefore = \frac{4}{3} \quad \text{for } n=m=1, \quad \frac{-2}{15} \quad \text{for } n=3, m=1, \quad \frac{36}{35} \quad \text{for } n=m=3.$$

よりの v'

$$R_s = \frac{\pi L B A^2}{16 F V^2} \sum_{n=1}^{\infty} b_n b_m \int_0^\pi \sin n\varphi \sin m\varphi \lambda \varphi d\varphi$$

$$= \frac{W \delta}{\pi^3 \lambda F^2} \sum_{n=1}^{\infty} (\quad) \quad , \quad b_m = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{nm}$$

$$\gamma_s = \frac{R_s}{W \cdot \delta} = \frac{16}{\pi^3 \lambda F^2} \left[\frac{4}{3} b_1^2 - \frac{4}{15} b_1 b_3 + \frac{36}{35} b_3^2 + \dots \right] \quad (17.12)$$

$$= \frac{64}{3 \pi^3 \lambda F^2} \left[1 - \frac{1}{5} b_3 + \frac{27}{35} b_3^2 + \dots \right], \quad (\because a_{01} = 1)$$

$$\left(\frac{64}{3 \pi^3} = 0.6880 \right)$$

よって ~~排水抵抗は~~ a_{nm} による関係し、また a_{01} 以外の項、つまり y 方向の揚力分布を變化させてもあまり減少する事なく、どちらかと言うと ~~一般に~~ ^{一般に} 他の項より増えると考えられる。つまり 殆ど排水量と λ と F で決まってしまう。

これに實際 19頁の表より (6.3) 式の値の約半分程度
程度の値となるのは、^{奥の}奥が深い。

またこのように見て来ると、^{同様に}飛沫なし船型(矩形型)の~~抵抗~~
抵抗が平板の約半分となっているのも面白い。

(7.12) は (7.5) の半分とは大分異なるし、(7.6) についても幾分の
差急にあるが、いづれにしても飛沫環境は A と F を決めれば、
^{船型}船型と排水量のみで決まる値と考える事は出来てゐる。

一方で $F=1$ 前後では、^{船型}船型抵抗はまた「前方」の
圧力分布で干渉が原因による減少が期待出来る。

いづれにしても飛沫なし船型はやはり有利なように見えてくるが、
さらに飛沫あり船型について最適化を試みる必要
はあるう。

この時 (7.6) が正しいならば「簡単であるので」
再検討の要がある。これ今所「解析的に正しい」と
考えられるけれども、それを数値的に確かめたいという
点に、疑念が湧いてくるのである。

8. 矩形圧力面の極値問題

長を L , 幅 B の矩形圧力面を

$$p(x, y) = A \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=1}^{\infty} a_{nm} \frac{\cos n\phi}{n \cdot \phi} \sin m\psi \quad (8.1)$$

$$x = -\frac{L}{2} \cos \phi, \quad y = -\frac{B}{2} \cos \psi$$

と仮定する。

π. 圧力面!

$$P \rho V = \iint p dx dy = \frac{\pi^2}{8} L B A a_{01},$$

と仮定するから $a_{01} = 1$ と仮定して

$$A = \frac{8 P \rho V}{\pi^2 L B} \quad (8.2)$$

抵抗は 逆流抵抗 R_w と 飛沫抵抗 R_s の和である。

$$R_T = R_w + R_s \quad (8.3)$$

$$R_w = \frac{k_0^2}{\pi \rho U} \int_0^{\frac{\pi}{2}} |F|^2 \sec^5 \theta d\theta \quad (8.4)$$

$$F = \iint p(x, y) e^{i k_0(x \cos \theta + y \sin \theta)} dx dy \quad (8.5)$$

$$R_s = \frac{\pi L}{8 \rho V^2} \int_{-\frac{B}{2}}^{\frac{B}{2}} |Q(y)|^2 dy \quad (8.6)$$

$$Q(y) = A \sum_{m=1}^{\infty} b_m \sin m\psi \quad (8.7)$$

かつその条件は

$$b_m = \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{n,m}$$

$$\sum_{n=0}^{\infty} a_{n,m} = 0 \quad (8.8)$$

$$\therefore \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n,m} = - \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n+1,m}, \quad \sum_{n=0}^{\infty} (-1)^n a_{n,m} = 2 \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n,m} \quad (8.9)$$

$$\frac{\pi L D}{7 F V^2} \times 64 \frac{F^2 g^2 V^2}{\pi^4 E F^2} = \frac{16 W \cdot \delta^3}{\pi^3 \lambda F^2}$$

No. 25

Date

$$\phi(\varphi) = A \sum_{n=1}^{\infty} (b_n) \sin n \varphi, \quad b_n = \sum_{m=0}^{\infty} (-1)^m a_{n+2m} \quad (8.10)$$

$$V_s = \frac{R_s}{W \delta} = \frac{16}{\pi^3 \lambda F^2} \sum_{n, \mu} \dots \quad \text{or } b_n \int_0^{\pi} \sin n \varphi \sin \mu \varphi \sin \nu \varphi d\varphi \quad (8.11)$$

$$W = \rho g V, \quad \delta = \nabla / L^3, \quad \lambda = B/L, \quad F = V / \sqrt{g L}$$

次に (7.11) の各項を

$$J_n(z) = \frac{1}{\pi i^n} \int_0^{\pi} e^{i z \cos \varphi} \cos n \varphi d\varphi$$

$$= \frac{z}{\pi i^{n+1}} \int_0^{\pi} e^{i z \cos \varphi} \sin n \varphi \sin \varphi d\varphi,$$

より

$$F = \frac{ALB \pi^2}{4} \sum_n \sum_m a_{n,m} i^n J_n(k_0 a \cos \theta) \frac{m i^{m-1} J_m(\frac{k_0 B}{2} a \cos \theta)}{\frac{k_0 B}{2} a \cos \theta}$$

$$= \frac{\pi^2 AL}{2 k_0 a \cos \theta} \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} (2m+1) i^{n+2m} a_{n,2m+1} J_n(k_0 a \cos \theta) J_{2m+1}(\frac{k_0 B}{2} a \cos \theta)$$

$$V_W = \frac{R_W}{W \cdot \delta} = \frac{16}{\pi \lambda^2 F^2} \sum_{n, \nu} \sum_{n, \mu} (2m+1)(2\mu+1) i^{n+2m-\nu-2\mu} a_{n,2m+1} a_{\nu,2\mu+1} \times$$

$$\times \int_0^{\pi} J_n(k_0 a \cos \theta) J_{\nu}(k_0 a \cos \theta) J_{2m+1}(\frac{k_0 B}{2} a \cos \theta) J_{2\mu+1}(\frac{k_0 B}{2} a \cos \theta) \times$$

$$\frac{d\theta}{\cos \theta a \cos^2 \theta}$$

(8.12)

n, ν は偶数 または odd のみ 値が 2.

極値問題は

$$V_T = V_W + V_S$$

について $a_{01} = 1, \quad \sum_{n=0}^{\infty} a_{n,2n} = 0$

なる副条件で係数を決定するとなる。

ゆえに $\nabla = L \cdot B T_E$, T_E : 有効吃水

と定義すると (8.11) から

$$R_S/W \propto \frac{(T_E/L)}{F^2} [\quad]$$

とよび略して T_E/L に比例する

一方

$$R_W/W \propto \frac{(T_E/L)}{\lambda F^2} [\quad]$$

とよび、造波抵抗は λ が大きくなると小さくなる。

つまり滑走面としては吃水が小さく幅が大きくなる方が有利である。